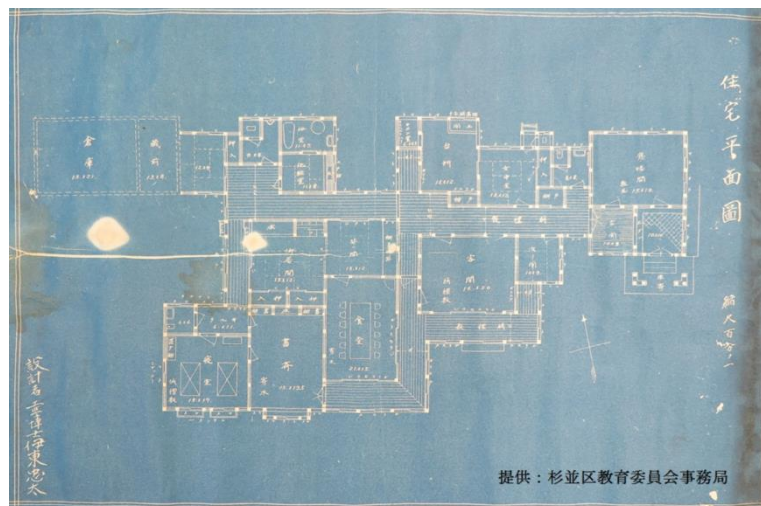


「^{てきがいそう}荻外荘」の建築的特徴とその魅力（その一）

竹中工務店 設計本部 アドバンストデザイン部門
伝統建築グループ やまの たかふみ
山野 敬史

一枚の平面図から話を始めたい。下図は「荻外荘」¹の創建時の間取を示す、「入澤達吉邸」の平面図である。そして、「法隆寺」の発見者であり、文化財保存に尽力した日本で最初の建築史家であり、様々な様式が混在する建築を手がけた建築家でもある伊東忠太によって描かれた貴重な図面である（杉並区指定有形文化財）²。当寄稿文では、創建時の図面から建築的特徴を読み解き、伊東忠太の住宅に関する文章と照らし合わせることで、「荻外荘」がもつ大きな魅力の一つに迫ってみたい。



入澤達吉邸平面図

それでは、平面図から読み取れる特徴を順番に抽出していこう。玄関は東端に位置しており、すぐ北側に応接室がある。玄関から東西に廊下が伸びており、北側に台所や女中部屋、浴室やトイレが配置されている。東西廊下のほぼ中央の位置より南北に廊下が伸びており、南に延びる廊下の西側に家族用のゾーン（居間、茶の間、食堂、書斎、寝室）、東側に客用のゾーン（客間、次の間）が配置されている。廊下によって部屋の用途毎のまとまりが区画されている点を第一の特徴とする。次に、それぞれの部屋が廊下によって結ばれていることを第二の特徴、客用の諸室と応接室の面積の全体に占める割合が大きいことを第三の特徴、そして家族用の諸室だけでなく、客間も南面の日当たりの良い場所に配置されていることを第四の特徴とする。以上は間取に関する特徴である。第五の特徴として、建物の構造面に着目したい。それは柱の数の多さとその配置である。

以上の建築的特徴からどのように伊東忠太の住宅観を窺い知れるのか。その答えは伊東が記した二つの文章にある。一つは大正4年(1915)に出版された『理想の家庭』における「住宅」の文章(以下、『住宅』)³。もう一つは翌年8月に出版された『婦人之友』における「中流の住宅は如何に設計すべきか」という文章である(以下、『中流住宅』)。いずれも当時台頭しつつあった中産階級の人々の住まいの在り方を述べた文章として非常に興味深い。

『中流住宅』をみると、多くの間取の方針が「荻外荘」の建築的特徴と合致する。「中流以上の住宅なら、各種の部分を大体区画することが必要」⁴というのは先述した第一の特徴に、「室と室との連絡はどこまでも容易にする」⁵は第二の特徴に、「各室とも充分に光線が入り、通風の良いこと」⁶は第四の特徴に合致する。また、伊東は「間取の工合は敷地の関係、家族の多少、主人の職業、富の程度、交際の広狭により千差万別」⁷としており、「荻外荘」全体として、これらのことが考慮されているとみていいだろう。そして、先述した第三の特徴は「交際の広狭」を考慮したものと考えられる。さらに構造面の特徴については『住宅』に、「家屋が堅牢」かつ「本箱や筆筒等の置き場を確保するために、「田型に四個の室が続いている場合」(中略)「二間に襖を四枚用いるよりは、左右三尺ずつを壁にして中部の間を襖にするような方針を採りたい」⁸という記載があり、上記第五の特徴と合致していることが分かる⁹。

現在の「荻外荘」は幾度の増改築や移築を経たものだが、この度の杉並区による「復原・整備プロジェクト」で一部を除いて、創建時のかたちに復原されることになっている。よって、われわれは完成した建物の間取と構造面から伊東忠太の住宅観を窺い知れる点に、時代をつむぐ「荻外荘」の大きな魅力の一つがあるといえるだろう。

¹ 「荻外荘」をカギ括弧付きで記しているのは、創建時の建物名称と区別するためである。「荻外荘」の最初の居住者は、大正天皇の侍医をも務めた入澤達吉で、当初は「楓荻荘」あるいは「楓荻凹処」と称された。「荻外荘」という名称は近衛文麿が住んだ後、西園寺公望によって命名された名称である。

² 杉並区教育委員会が作成した『国指定史跡 荻外荘(近衛文麿旧宅)』に、平面図の解説が記載され、その要所は、「中廊下形住宅と伝統的な書院造風の雁行形を合わせた間取」と洋風な生活様式を取り入れたことの指摘だと言える。

³ 国民新聞社によって上野公園不忍池畔で開催された、家庭博覧会に合わせて出版されたもの。

⁴ 『婦人之友』第十巻、第八号(簡易休養号)、大正5年8月、p.27

⁵ 同書、p.26

⁶ 同書、pp.26-27

⁷ 同書、p.26

⁸ 『理想の家庭』国民新聞社、大正4年5月、p.123(内田青蔵監修『近代日本生活文化基本文献集-ひと・もの・住まい-』第I期 明治・大正編 第7巻、日本図書センター、2010年6月、p.165)

⁹ 例えば平面図の客間の南面の扉と壁の配置が典型的。